

今回の特別講演・シンポジウム開催にあたって

澤田拓士（動物用抗菌剤研究会 理事長）

家畜の呼吸器病と下痢は特に集団飼育が盛んになって以来、畜産における最大の生産性阻害因子である。これらの疾病を治療するための抗菌薬の応用はこれまで多大な効果を発揮してきた。しかしながら、同時に耐性菌の選択的増加をもたらすこととなった。その結果、耐性菌にも有効な新薬の開発とともに、既存の抗菌薬をより適切に、慎重に使用することによって耐性菌の増加を抑制し、有効な薬剤をより永く使用可能にする努力が払われている。

これら抗菌薬の「適正使用」、「慎重使用」を進めるためには家畜の耐性菌保有状況を常に把握しておくことが基本となる。また、それら起因菌の薬剤耐性と病原性との関係を知ることも疾病対策に重要であり、抗菌薬の新たな効果の発見にも繋がることもある。そこで今回、特別講演では、依然として発病率や死亡率が高く、大きな経済的損失をもたらしている子牛および子豚の大腸菌症に関して末吉益雄先生に、起因菌が薬剤耐性を獲得しても同時に相変異が起こって病原性が弱まり、治療効果が認められる現象の解明について桑野昭先生にご講演をお願いした。

また、究極の抗菌薬ニューキノロンとして登場したフルオロキノロン系抗菌薬が動物用として承認されてから約20年が経過した。これまで何度か主として効能・効果についてシンポジウムでとりあげてきた。最近では、家畜由来細菌の耐性化傾向が報告され、本耐性菌による人への健康被害が心配されるようになった。現在このリスク評価

を食品安全委員会で検討中である。しかしながら、我々がこれらの抗菌薬の使用と耐性菌の発現の実態についてどこまで把握しているかは疑問である。そこで、臨床現場における抗菌薬の慎重使用の実践と普及をさらに促進させるために、獣医療においても極めて重要な本抗菌薬に関して実態調査や実験的解析を含む広範囲にわたる事実を認識することを目的として「家畜におけるフルオロキノロン剤の使用と耐性発現について」をテーマにシンポジウムⅠを企画した。まず、耐性菌の疫学について浅井鉄夫先生に、続いて、畜産現場における抗菌薬の使用状況と臨床効果について加藤敏英先生に、*in vivo*における耐性獲得試験について小澤真名緒先生にご講演をお願いし、最後に、抗菌薬の慎重使用について平山紀夫先生にガイドライン（案）を示して頂いた。

さらに、シンポジウムⅡでは、新しい企画として「新効能動物用抗菌性物質製剤」のテーマで、岩隈昭裕先生にはセフトロムについて、北代典幸先生にはオルビフロキサシンについて紹介して頂いた。

盛り沢山の企画であったが、何れのご講演も広範で豊富な内容の調査や試験を解りやすく纏めて話して頂き、大変勉強になった。また、討論も活発で、内容が興味深いものであったことの証と思われた。演者の先生方に改めてお礼申し上げるとともに、これらの調査・研究がさらに発展することを願っている。